1487号(夕焼け通信 創刊1993.4.23)　2025.4.21
〒690-0871 島根県松江市東奥谷町386-7　gosuitei.sakura.ne.jp/yuyake/　編集 宮森健次

老い老いに

木幡智恵美

30

さまざまな催しの案内が夕焼け通信に載るようになった。最初の講演案内がなされ、記録が掲載されたのは、一九九五年十月に隠岐で開催された尹健次氏の講演だ。演題は『戦後五〇年―日本人と日本社会』。尹氏が書かれた岩波ジュニア新書『きみたちと朝鮮』は我が家の本棚に並ぶ一冊で、奥様の尹嘉子さんの挿絵が彩を添えている。

次が伊藤ルイ氏で、一九九六年四月、『共に生きる喜びを』と題して講演録が載った。残念なことに、講演で隠岐の島を訪れた二ヶ月後にルイさんは病に倒れ逝去される。ルイさんと縁ができた夕焼け通信には追悼文が寄せられた。

一九九七年には岡部伊都子氏の講演が十月に開催され、『刻々を美しく』の演題で講演録が連載されている。婚約者を沖縄戦で亡くされ、自らをも加害者として綴り、さまざまな随筆を書かれた方だ。

そして、年が明けた一九九八年一月に、『加害者としての私の戦争体験―日本は中国で何をしてきたか』の講演が開かれ、鹿田正夫証言録として連載された。

編集長の赴任先の隠岐でさまざまな講演が催されてきたが、最後となったのが一九九八年三月『家族の過去・現在・未来―介護関係をめぐって』だ。家族社会学者である春日キスヨ氏のお話で、五月から講演録が掲載された。

編集長が奥出雲へ、Y氏が広瀬に行ってからも、講演は次々と催され、講演録が夕焼け通信に載せられた。一九九八年七月に広瀬で行われたのが徳永進氏によるもので、『ぼくが見たいのち』として掲載される。その年の十月に奥出雲町横田で開かれたのが、新聞社勤務後様々な活動をされている吉田健作氏による講演、『「歩いて聞いて考えた」部落問題』。

演題から想像がつくだろう。多方面にわたる内容の講演が行われ、講演録が夕焼け通信に載った。どの講演にも行けなかったが、文章を読むだけで講演を聴いた気分になれた。多忙な中テープを起こして文字にしてくださった編集長。私も一時期，視覚障がい者の就労支援をしていて、テープ起こしのチェックを日々行っていたので、時間と根気を要するその作業の大変さはよく分かる。そんな苦労もいとわずに、読者に広く伝えたいとの思いから、大仕事を続けた編集長には敬服する。

座付き雑記1

宮森健次

座付き作者

西川津から東奥谷に引っ越した。部分的に新しくなった実家に移り住むことになった。引っ越しは、五六年ごとに八回繰り返したが、もうこれで最後にしたい。天災に見舞われたのなら仕方がないが、若い時分には何でもなかったことが苦痛になってきているのを今回はことに感じた。本を詰めた段ボール一つをこっちはヨイショと持ち上げているのに、引っ越し業者の若者はそれを三つ重ねて苦もなく階段を上り下りしていた。

西川津では朝酌川がすぐそばを流れていたので、一歩外に出れば川面を見、飛び交う水鳥を目にした。それが見られなくなるのは淋しいが、何かを得れば何かを失うのが道理、なくしたものは数えまい。ついでに、朝酌川に架かるがらがら橋を通ることもなくなったので、当欄の題名も替えないといけなくなった。ふと浮かんできたのが座付き作者という言葉。座付き作者とは、芝居小屋などに専属している物書きのことで、その一座がかける芝居の脚本を書く人を指す。だが実際には江戸時代の座付き作者はそれだけでなく、プログラムを組んだり、配役を考えたり、演出したりとあらゆる雑事をこなしていた。自分がしないまでも俳優以外のすべてが座付き作者の仕事だったのである。それを知ったとき、今の自分が落語教室でしていることとよく似ていると思った。高座に上がることはないが、それ以外はすべて担う。オリジナルのストーリーも作ればチラシも作る。公演のマネージメントもする。どの子がどんなネタをかけて順番はどうするなど、誰にしてもらうわけにもいかず、自分でするほかない。使っている道具や手段が違うだけで、やってることは江戸時代のそれと何ら変わりない。昔の人も同じことで悩んだり喜んだりしたに違いないと思うと何だか心強い。

さて、引っ越したところまではよかったが、今大いに困惑していることがある。ネットの開設工事を申し込んでいたのに、施工の連絡が待てど暮らせどなく、しびれを切らしてコールセンターに問い合わせた。折り返し施工業者から電話があり、「電話しようと思っていました」と宿題なら親子げんかになりそうな言い訳が始まった。挙げ句「もう、二、三カ月先になります」と脱力するようなことを言うので、すっかり気持ちが萎えてしまった。文句を言いたかったが、電話口の女性に非があるわけもなく、同種の電話をさせられては小言を浴びているだろうと想像できたので、何も言わなかった。我が身のネット依存の様子を客観視する貴重な機会になるかもしれないしな、と酸っぱいブドウよろしく呑み込むほかない。

ニュース日記　964

中村　礼治

ポスト資本主義の未来は描けるか

30代フリーター　東西冷戦の時代には「資本主義」は西側陣営から「自由主義」と呼ばれていた。「自由主義陣営」といった言い方で。冷戦期の終わりごろからは「新自由主義」と呼ばれる経済政策が勢いづき、資本主義は「自由」と切っても切れない関係にあるという通念が世界を覆った。

トランプ関税はその通念を打ち砕いた。国家が国境の壁を高くするだけで、たちまち資本主義の「自由」は縮小することをトランプは示した。資本主義は常に自由とともにあるという考えが錯覚だったことがあらわになった。

年金生活者　それはすでに中国が「社会主義市場経済」と称して表現の自由などの抑圧下で資本主義の導入に成功したことで確かめられていた。それがいま世界規模で明瞭になったと言える。

もともと資本主義は、自由よりも、自由を制限する国家に守られて発展した。資本主義の最初期の段階の商業資本主義は、国家の軍事力に支えられた植民地貿易、遠隔地貿易を利潤の源泉とした。次の段階の産業資本主義は機械制大工業に必要な交通・通信などの大規模なインフラ整備を国家に頼った。

ポスト産業資本主義の段階に入って、インターネットが普及したおかげでようやくインフラ整備を国家にあまり依存しないＧＡＦＡＭのような大企業が登場した。しかし、それらの企業もこれからの成長に不可欠のＡＩの開発では国家の手を借りざるを得ない。

30代　マルクス主義は資本主義以上に国家による経済の統制を推し進め、ソ連のような収容所国家をつくりあげた。

年金　マルクス主義とは反対に、統制からの解放こそが社会主義と考えたのが吉本隆明だ。

吉本は社会主義を次の三つの条件によって定義した。

①一般の住民大衆の無記名直接投票でいつでも政府をリコールできること②国軍を持たないこと③住民大衆への抑圧にならないことを条件に、個人の不利益になるものに限って生産手段を社会化すること（講演「社会党あるいは社会党的なるもののゆくえ」、１９９３年）。

国家は資本主義のシステムには手をつけず（①②）、むしろ手を引いていく（③）というところに、この定義の特徴がある。国家が経済を統制するマルクス主義の社会主義像とはおよそ正反対のものだ。その前提にあるのは、国家による自由の制限こそが格差を生むという、反マルクス主義的な考えと推定される。

30代　国家の再分配機能が貧富の差を縮める役割をしているという常識に慣れ親しんだ私たちにはなかなか飲み込みにくい発想だ。国家が経済への介入から手を引けば、ますます格差が広がるではないかと反射的に考えてしまう。

年金　逆の理解も成り立つ。たとえば、資本家が手にする利潤を考えてみると、それが可能なのは私的所有が野放しにされているせいのように見えるかもしれない。だが、労働者が自らの労働によって生み出した剰余価値を自分のものにできないよう、労働者の私的所有権が、等価交換の原則にもとづく国家の法によって制限されていると理解することもできる。つまり格差は私的所有の不徹底さの上に成り立っている、と。吉本は次のように語っている。

「私有財産、私的所有は『ないほうが、いい』みたいにいうのは、大なり小なり、すべて宗教なんです。ロシア・マルクス主義も宗教ですし、スターリン主義や毛沢東主義も宗教です。『無所有一体』を唱えるヤマギシ会もそうです」「所有概念、所有の思想性を確立することは、今後の課題の一つです」（『超「20世紀論」下』）

社会主義とは資本主義を国家のくびきから解放することだ。吉本はそう言っていると理解することができる。

30代　しかし、そんなことをすれば、規制緩和を推し進めた新自由主義が金融危機に行き着いたことからもわかるように、企業活動も国民生活もたちまち危うくなる。その救済と引き換えに国家による制約が強まるだろう。

年金　したがって、制約を取り払っても破綻しないくらいまで資本主義が発展を遂げるのを待つほかない。だが、待つだけでは、国家は資本主義にかけたくびきを外すことはない。法をその本質とする国家は社会にくびきをかけることを存在理由としているからだ。

資本主義が発展すればするほどそれに制約を加えたがるだろう。すでに世界の各国は「経済安全保障」の名のもとに企業の活動を法で規制し始めている。グローバル化とともにサプライチェーン（供給網）が世界中に広がり、そのぶんだけ紛争や災害で寸断されるリスクも増大した。それを回避することが経済安全保障の目的とされている。

個人や企業の自由を奪うそうした国家の習性に歯止めをかける方法のひとつが、吉本が社会主義の三つの条件のひとつとしてあげた国家を開くこと、具体的には一般の住民大衆の無記名直接投票でいつでも政府をリコールできるようにすることだ。

そうしておけば、資本主義が今後さらに発展し、国家による規制を緩めても破綻することなく自立して前進できるようになったとき、国家が旧来の規制を固守しようとしたり、新たな規制を加えようとしたりすることを阻むことができる。